

# 更級への旅

## 「里のしおりの説伝捨姨」劇寸の真迫しく楽し

さらしな里(旧更級村)芝原地区の住民有志でつくる「芝原あにさんず&あねさんず」の寸劇「姨捨伝・しおりの里」が面白いです。芝原公民館で四月にあった第26回同区学習実績発表会でも披露され、とても好評でした。約十分の長さで構成されたせりふをあらかじめ録音しておき、本番ではそのテープの声に合わせて役者が演技をする仕掛けです。

▽微妙なスレ  
劇は他国から難題を突きつけられた更級の殿様が解ける者を領内で探し、老婆が解いて以後、老人が大事にされるようになったというお話です。当地ではおなじみの物語ですが、「芝原あにさんず」チームの寸劇はなんとも面白いのです。老いた母親を背負った息子が会場の後方から現れたときは度肝を抜かれました。下の写真です。

次に左の写真をご覧ください。右の奥に冠着山が描かれたボードが見えます。息子はここに向かって進み、老婆は息子の帰りの道しるべにするため、道沿いの木の枝を折ります。右手前に写っているのが折れた折(しおり)です。写真は「捨てる」というお触れを守らず、老いた母親を匿っていたことを息子が殿様の前で託(たく)する場面です。

見入って、聞き入ってしまいました。役者がせりふを語らず録音の声に合わせて動作をするので、じゅっかん動きが遅れ、そのズレが不思議な面白さを醸し出します。



んの四人に芝原公民館に集まっていたいただきお話をうかがうことができました(中央の写真、左から森さん、中村ツル子さん、中村霞さん、近藤さん)。

▽BGMも  
せりふを録音にしたのは、観客にちゃんと声を届けるためだそうです。実は、学習実績発表会での昨年十月「さらしな里縄文まつり」の芸能大会でも披露したのですが、この芸能大会はこれまで演者の声がちやんと観客に届かないという問題が、まつり後の反省会でよく取り上げ



老婆が自分の知恵を、老人とは思えないバイタリティーで息子に教える場面は、特に笑いを誘いました。

この学習実績発表会では芝原地区在住の七十七歳以上のお年寄りを招待し、地区のご婦人たちが作ったお手製の料理と一緒に楽しんでもらう場でもあります。お年寄りも身を乗り出して見ていました。

こうした寸劇をどのように考え出したのか知りたくて、発案者たという中村ツル子さんに電話したところ、お仲間をつくる「寿弥会」のメンバー四人で考えたとのこと。中村さんのほか近藤文子さん、森政子さん、中村霞さん

### 芝原・寿弥会の知恵で創作

を何匹か捕まえてきてもらいました。胴体の部分を押さえ、糸を巻きつけようとして腹はいいになり、あらかじめ輪の形にした糸を、アリの顔をくっつけんばかりにして数十分、格闘しました。しかし、胴体に巻きつけたと思っただけ、動かなくなっていました。別のアリには胴と両足を一緒にゆわえてしまったので、ほら貝の入口部分に置いて進みません。

お手上げの状態でした。笑って見ていたご主人の保男さんに、後を任せて外出し帰ってきたら、なんと通してくれていました。ビニールの紐テープを入口に置き、電気掃除機で出口側から吸引したそうです。ぐるぐる回るほら貝の中を通したのが、現代文明の利器であるとはいえず、それを使えばほら貝に糸を通ることを実証してみせたこの知恵はすぐれものです。紐が通ったほら貝は世界に一つかもありません。

役柄は老婆を中村霞さん、息子と殿様はそれぞれ、声も担当した山越秀人さんと中村重隆さんが演じました。さらに家来は大谷憲夫さんと大谷利久さん、農民は森政子さんと豊城信子さん、近藤文子さん、中村ツル子さん、立ち木は池田美恵さん、近藤文子さんと中村霞さんが担当しました。

▽世界に一つだけのほら貝？  
寿弥会には小道具、特に難問を解いた結果に出来る上がる三つの物の制作にこだわりました。まず紐が中を通ったほら貝。中村ツル子さんは、足に糸を巻きつけたアリが出口の穴に塗った蜂蜜に誘われて糸を通したという筋書きに従って、まずお孫さんにアリ

寸劇のシナリオとせりふは、さらしな里歴史資料館で上映されている姨捨伝の物語から借用しました。声を担当したのは、物語の筋を語るナレーションが前芝原区長の長谷憲夫さん、おぼあさんの声は近藤文子さん、息子は山越秀人さん、殿様は中村重隆さんが吹き込みました。

せりふには背景音(BGM)も添え、その音楽には「明日の記憶」という映画の中で奏でられた曲を使用しました。若年性アルツハイマー病に侵された男(渡辺謙)とともに喪失を乗り越えようとする妻(樋口可南子)の情愛を描く物語で、二〇〇五年に公開されたこの映画を見た森政子さんが姨捨伝説にはびつたりと思っただけです。この選曲が寸劇物全体に迫真さを与えていると思います。



んが、金属網の上に塩漬けにした縄を置いて、熾き火状態になったところを見計らって焚口に入れるのを、何度か繰り返して出来あがりでした。

もう一つ、幹の上の方が太い切り株は、近くのべんとり山(紅取山)に実物を探しに行きましたが見つからず、段ボール箱を加工して作りました。近くで見ると、年輪も描かれ、日当たりのいい方がちゃんと間隔が広がって見えます。以上の三品は中央の写真の四人の前に並んでいます。

しおり(枝折り)の枝は青々としていて簡単に折りやすいという条件を満たすものを探し、いろいろの木を探しました。結果的に春先は、生垣によく植えられるレッドロビン(カナメモチ)が適任というところで使いました。舞台上では観客にはつきりとは見えませんが、世界に知られる日本映画の巨匠、黒澤明監督並み(?)に細部にこだわっています。

寿弥会はもとも日本舞踊を学ぶ趣味の会として三十年ほど前に発足しました。多いときは五十人ほどいたのですが、高齢化で人数が少なくなりました(発足当初の会の名前は「芝原舞踊会」)。五年ほど前から縄文まつりの芸能大会に参加し、寸劇にまで芸の幅を広げました。「寿弥」という会名は、日本舞踊を教えてくださったというお師匠さんのお名前から来ています。

「姨捨伝・しおりの里」の役者の衣装はすべて寿弥会の四人で作られ、それぞれに入れて保管し「体だけ持ってくればだれでもできる」態勢にしているそうです。お呼びがかかれば、デイサービスのような福祉の場でも披露したいとおっしゃっています。

なお芝原地区の学習実績発表会は、コーラスやカラオケ、舞踊など趣味のグループが登場するほか、更級小学校に新入学した同地区の一年生を一人ずつ紹介し、校歌を参加者全員で合唱するのが伝統になっています。

発行 二〇〇九年 五月十七日  
編集 さらしな堂  
(代表・大谷善邦)  
〒三八九・〇八二三  
長野県千曲市大字若宮二一八四・六  
(旧更級郡更級村)